

## 医療ルネサンス

No.6788



## ふるえ

2 / 6

## 難病に腹からポンプ投薬

かつて保育園に勤務する看護師だった仙台市のA子さん(60)。40歳の頃、右手足が徐々に動かさなくなってきた。車の運転もままならず、仕事を辞めた。

整形外科で腰のヘルニアの治療を受け、レントゲンに異常が映らなくなっても手足は動かさない。その後、寝返りも打てなくなった。

「何かおかしいぞ」

別の医師の勧めで神経内科を受診すると、パーキンソン病と判明。処方された薬を飲み始めると、1か月ほどで元のように歩けるようになった。

パーキンソン病は、脳の神経細胞が減少し、情報を伝えるドーパミンという物質が減ること、手足が動きにくくなったり、ふるえたり、筋肉が硬直したりする難病。根本的な治療法はなく、ドーパミンを増やす薬などで病状の改善を目指す



装着したポンプの専用ポンプを武蔵野大学に貸与したA子さん(左)と、A子さんの主治医、田中先生(右)。

す。ただ、薬を続けていると、効果が不安定になることも多い。

A子さんも薬はよく効いたが、飲み始めて3、4年ほどすると、効き過ぎて体が勝手にくねくねと動いてしまう症状のジスキネシアが起きるようになった。

一方で、効き目が途切れて体が動かなくなるウェアリングオフにも悩まされ

らい、薬を飲んで効くまで待った。

「いつ動けなくなってしまうのか予測できず、外出が怖くなりました。自分に自信もなくなっていました……」

いよいよ体の動きが悪くなり、医師の紹介で神経難病の治療に詳しい国立仙台西多賀病院を訪れた。

院長で主治医の武田篤さんが勧めたのが、おなかに

穴を開け、持ち運び式のポンプから継続的に薬を注入する「デュオドーパ」(商品名)だ。ジスキネシアとウェアリングオフの両方を抑えられるうえ、看護師経験があるA子さんなら、機器の操作にも困らないだろうという判断だった。

手術が必要になるだけに、Aさんは悩んだ。

「先生が同じ病気でも、受けますか?」

「俺なら受ける」

保険が認められたばかりで、この病院では初めてのケースだったが、欧米での実績を知っていた武田さんが背中を押した。Aさんは2016年11月、手術を受けた。

リハビリを乗り越え、今では自転車こげられるようになった。学生時代に親しんだ卓球も、百貨店での買い物も、不安なくできる。

「前は、できないことは数えていたけど、できることを数えるようになりました」。気持ちも笑顔も明るくなった。